

2020年7月12日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「さらに、さらに、祈りを」ヨハネによる福音書13章7～8、14節
主任牧師 加藤 誠

「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」、「もしわたしがあなた(の足)を洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」(ヨハネ13・7～8)、「わたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」(ヨハネ13・14)。

主イエスに従う者たちは、どういう人間なのでしょう。そして、その人々はどのようにしてイエス・キリストの教会として建てられるのでしょうか。

今朝ご一緒に開いたヨハネ福音書13章には、キリスト者／教会にとって非常に大切な示唆が記されているように思います。

主イエスに従う者たちは、どのような人間なのでしょう。

福音書から浮かび上がってくる弟子たちの姿は、一つ目には「自分の姿が見えていない者たち」です。自分の弱さ、間違いが見えていない。そのために「自分は正しい!」と自分を絶対化し、他者を非難できてしまう。主イエスはそのような弟子たちをしばしば厳しく戒めています。「他人の目の中にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか」と。

また弟子たちの二つ目の姿は、「神さまの御心(神さまが考えておられる計画)が見えていない者たち」です。弟子たちは自分の理解できる範囲、信じられる枠の中でしか、主イエスの言葉を理解できません。そのために弟子でありながら主イエスの心、主イエスの思い、計画から「いつも遠い者たち」でした。主イエスが起こされる「奇跡」(神さまの不思議)を邪魔し、立ちふさがるのはいつも弟子たちです。「そんなこと、無理です」と。私たちは神さまの「これから(ご計画)」を語ることはできません。神さまだけが、神さまのご計画を語られるのです。

そして、福音書が指し示す弟子たちの姿の三つ目は、「主イエスの執り成しの祈りに鈍感な者たち」です。このヨハネ13章でもそうです。主イエスご自身は十字架を前に心引き裂かれる思いで最後の食卓を囲んでおられるのに、弟子たちはその主イエスの深い愛と悲しみがわかりません。自分たちがどれほど主イエスに深く愛され、心配され、祈られているか。そのことに実に鈍感なのです。

このヨハネ13章の場面は、いよいよ十字架が迫っている緊張の場面です。しかし弟子たちは「自分は大丈夫」と思っていました。一番弟子を自認していたペトロは、神さまの計画を予想し、どんな迫害を受けても主イエスに従い、「死んでも後悔しない」という強い信仰と覚悟を口にしています。そのペトロは、主イエスが「あ

あなたの足をわたしが洗おう」と申し出られた時、「そんな必要はありません」と答えました。「わたしの足は、わたしが洗います（自分のことには自分で責任を持ちます）」ということでしょう。しかし、主イエスはそのペトロに驚くべき言葉を語られます。「もし、わたしがあなたの足を洗わないなら、わたしとあなたとは何の関係もなくなる」と。それはつまり、主イエスとペトロたち弟子たちとの関係は、「弟子たちの頑張り、努力、信仰」ではなく、「主イエスが弟子たち一人ひとりの足を洗われる、その一点にかかっている！」ということなのです。

ここに、主イエスに従う者たちの「教会」がどのように建てられるのか、教会の「土台」とは何かが明確に示されています。「教会」は弟子たちの頑張りで建つのではない。ただただ情けない弟子たちの足をどんな時も、どんな状態でも洗い続けられる、主イエスの深い祈り、赦し、そして愛が「教会の土台」なのです。

その「土台」なる主イエスは弟子たちに呼びかけます。「あなたがたの師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」と。ここで「互いに足を洗い合う」とは、具体的にはどういうことでしょうか。足は体の中で一番汚れと臭いがひどい部分です。他人の足を洗うことは簡単にできることではありません。しばしば「足を洗う」とことと「相手をゆるす」ことが重ねて語られたりしますが、主イエスは「あなたが赦せない相手の足を洗ってあげなさい」とは言われていません。「互いに足を洗い合いなさい」と言われている。誰かの足を洗ってあげるだけではなく、あなたの足を誰かに洗ってもらいなさい…という「相互の関係」を生きるように主イエスは招いておられるのです。つまり「赦してあげる」「洗ってあげる」という一方通行の関係ではなく、「このわたしも誰かに洗ってもらわないと立ち行かない」という、「互いに」の関係を歩みなさいと招かれているのです。この「互いに」の関係は、自らの不完全さ、弱さ、限界を自覚できていないとできないことです。

先週の総会において私たち大井教会は、大切な、とても重い決断をしました。過半数ギリギリの決断には、今の私たちが抱えている迷い、戸惑い、行き詰まり、弱さがそのまま映し出されています。ありのままの弱さと言ってもよいかもしれません。その私たちが教会として歩めるとしたら、それは私たち一人ひとりの足もとにひざまずき足を洗い続けておられる主イエスの深い祈りと招きを大切に受けていくこと。その一点にかかっているのではないのでしょうか。私たちの信仰や努力が教会を建てるのではない。ただ主イエスの深い祈り、赦し、愛を受けて、互いに足を洗い合う関係に押し出されていくこと。そのために「さらに、さらに、祈りを」求められているのです。新礼拝堂建築のプロセスを通し、この私たちが教会として建てられる内実が少しでも深められますようにと、祈ります。